

KONAN UNIVERSITY

『緋文字』規則違反紋章の謎

著者	青山 義孝
雑誌名	甲南大學紀要. 文学編
巻	162
ページ	25-30
発行年	2012-03-30
URL	http://doi.org/10.14990/00001052

『緋文字』——規則違反紋章の謎

青 山 義 孝

17世紀の後半、ヘスター（Hester Prynne）の死後、ボストンのピューリタンたちはヘスターとディムズデイル（Arthur Dimmesdale）の墓を結ぶように二人の墓の中間に墓石を一つ建てた、と記してホーソン（Nathaniel Hawthorne）は『緋文字』（*The Scarlet Letter*）を締めくくった。

And, after many, many years, a new grave was delved, near an old and sunken one, in that burial-ground beside which King's Chapel has since been built. It was near that old and sunken grave, yet with a space between, as if the dust of the two sleepers had no right to mingle. Yet one tombstone served for both. All around, there were monuments carved with armorial bearings; and on this simple slab of slate—as the curious investigator may still discern, and perplex himself with the purport—there appeared the semblance of an engraved escutcheon. It bore a device, a herald's wording of which might serve for a motto and brief description of our now concluded legend; so sombre is it, and relieved only by one ever-glowing point of light gloomier than the shadow:—

“ON A FIELD, SABLE, THE LETTER A, GULES.” (264)

この墓石が『緋文字』解釈の鍵であることは衆目の認めるところである。二つの墓の間に隔たりがあることを重視するか、隔たりはあるものの二つの墓を結ぶかたちで一つの墓石が建てられていることを重視するかで解釈は分かれるが、この点に関してはすでに『『緋文字』入門』最終章他で詳述しているので、本稿では墓石に彫られている紋章に焦点を絞りたい。

『緋文字』研究は毎年数多くの論文が発表され盛況を極めているが、ホーソンが墓石に彫られた紋章を紋章用語で表現した墓碑銘とも言うべき“ON A FIELD, SABLE, THE LETTER A, GULES.”の表象性ならびに意味については未だに謎のままになっているといつてよからう。管見する限りでは、従来の批評で

この紋章・墓碑銘に関する決定的と言えそうな解釈は見当たらない。最近ではネット上にこの紋章・墓碑銘の意味をめぐる短めの論文が載ったり、その多くは学生のもんと思われるが質問や解答が多く寄せられているが、しかしながらいずれを見ても曖昧模範とした内容にとどまっている。以下、この紋章・墓碑銘の謎に迫りたい。

のっけからこんなことを言うのと興を殺ぐことになりはしないかと気が引けるが、ヘスターとディムズデイルの墓石に墓碑銘は刻まれていない。刻まれているのは「盾形の紋地」のようなものであって「黒キ紋地ニ赤キ文字 A」という碑文ではない。「黒キ紋地ニ赤キ文字 A」は盾形の紋地の図案をホーソンが、あるいは語り手が、「紋章用語で表現」したものにすぎない。小説であるから、あるいは作品の最後にこの図案そのものを印刷することも可能であったであろうが、ホーソンはそうはしないで文字化した。ということは図案で示すのではなく文字でそれも紋章用語で表現しなければならなかった、あるいはそうすることでのみ表現しうる何かがあったのではないか、という推測が成り立つ。

ともあれ冒頭に引いた文章の後半をつぶさに検討しよう。まず“there appeared the semblance of an engraved escutcheon”とあるが、この紋章がはたして正式の紋章としての条件を備えているのかがまず第一点。さらにその紋章の図案を紋章用語で表現すればそれが“a motto and brief description of our now concluded legend”の役割を果たし、陰鬱きわまりないこの『緋文字』という物語を救う唯一の“one ever-glowing point of light gloomier than the shadow”とされている点が第二点。そして最後に墓碑銘“ON A FIELD, SABLE, THE LETTER A, GULES.”そのものの意味。

この墓石に彫りこまれている盾形の紋章が、いまだに好事家の目にふれては、その意味をめぐってとまどいさせている、とホーソンは言う。これはどういう意味なのだろうか。なぜ好事家を戸惑わせるのか、その原因の究明から始めよう。

ピューリタンは人間の想像力を敵視もしくは軽視し、詩や演劇や絵画などといった芸術を禁止したり弾圧したりした。したがって17世紀のニュー・イングランドには見るべき芸術活動は存在していなかったといっても過言ではない。もちろんアン・ブラッドストリート (Anne Bradstreet) のような詩人はいたが、これは例外であった。しかしながらピューリタンに想像力がなかったわけでも芸術に関する興味関心がまったくなかったわけでもない。理想的なキリスト教世界を創設するという信仰上の使命を優先させるために想像力を発揮することを自ら禁じ抑え込んだのである。そうしたピューリタンにも芸術的な想像力を発揮する機会があった。ラドウィグ (Alan I Ludwig) が、地道なフィールドワークを通して撮影した数多くの墓石の写真を盛り込んだ *Graven Images* の中で明らかにしたように、ピューリタンたちは墓石をキャンパスに見立てて想像力を発揮したのである (Ludwig)。

ところで森護『ヨーロッパの紋章——紋章学入門』によれば、西洋の紋章と日本の紋章の相違として特筆される特徴の一つは、日本の紋章が単彩であるのに対して西洋の紋章は「多彩」であるという事実である。しかし紋章が多彩であることは何色を使用してもよいということではなく、使用する色とその彩色方法に厳しい制限がある。紋章に使用する色 (Tinctures) は金属色 (Metals)、原色 (Colours)、毛皮模様 (Furs) の三グループに分けられ、金属色は金 (Or) と銀 (Argent) の二種、原色は赤 (Gules)、青 (Azure)、黒 (Sable)、緑 (Vert)、紫 (Purpure)、深紅 (Sanguine)、そしてごく稀に橙 (Tenny)、などに限られ、これらの色の中間色やパステル・カラーはいっさい認められない。紋章に使用する色がこのように限られた色、しかも原色を中心としているのは、その識別性を高めるため以外に理由はない。戦場で相手の騎士の姿をヘルメットの細い隙間から覗き見るためにも、あるいは遙か彼方から望見しても、一見して「何某の誰」と即座に判別を可能にするための制限である。しかも単に色の数を制限しているばかりでなく、彩色の方法にルールが設けられている。それは「金属色の上に金属色を重ねること」、つまり金の上に銀とかその逆の彩色、あるいは「原色の上に原色を重ねること」、つまり赤の上に青とか、黒の上に緑などという彩色はいっさい禁止事項になっており、“Metal on metal, or colour on colour is false arms.” (金属色の上に金属色、原色の上に原色は偽の紋章、あるいは違反紋章) という格言めいた言葉があるほどである。(70-72)

当然、この制限を破って金属色の上に金属色、原色の上に原色を重ねるという禁止事項を侵してしまえば、紋章としての体をなさなくなり、偽の紋章、違反紋章ということになる。真の紋章の例をウォルター・スコット (Sir Walter Scott) の『軍医の娘』 (*The Surgeon's Daughter*) から引いてみよう。

Yet his gratitude to her father did not appear to have slumbered, if we may judge from the gift of a very handsome cornelian seal, set in gold, and bearing engraved upon it Gules, a lion rampant within a bordure Or, which was carefully despatched to Stevenlaw's Land, Middlemas, with a suitable letter. (79)

ここで使用されている色は原色の赤 (Gules) と金属色の金 (Or) の取り合わせであり、ここで言及される紋章は正統な紋章に相違ない。

一方、ホーソーンが描く紋章に目を転ずると、“ON A FIELD, SABLE, THE LETTER A, GULES.” と原色である黒 (sable) の上に原色の赤 (gules) が重ねられている。これは明らかに違反紋章である。これほどまでに明白な違反を侵している紋章であれば、後世の好事家が戸惑うのも当然である。こうした紋章の彩色は基本中の基本であり、よほどの素人でない限り、こうした違反を侵すことはあり得ない。それならばホーソーンは基本的な禁止事項をもわきまえない素人であったのかというと決してそうではない。もしホーソーンの知識不足ゆえにこうした配色を施したのであれば、好事家を戸惑わせているなどと書くはずがない。そうではなく、ホーソーンは基本的な禁止事項をわきまえたうえで、意図的に違反紋章を作り上げているのである。その「意図」についてはのちほど追求することにして第二点の考察に移ろう。

件の紋章の図案を紋章用語で “ON A FIELD, SABLE, THE LETTER A, GULES.” と表現すれば、それが「いま語りおえた一部始終の題辞にも簡略な説明にも役立ち」、陰鬱きわまりないこの『緋文字』という物語を救う「影よりもなお暗い一点の燃えつづける光」になるとホーソーンは言う。この “It bore a device, a herald's wording of which might serve for a motto and brief description of our now concluded legend; so sombre is it, and relieved only by one ever-glowing point of light gloomier than the shadow [...]” という個所は、『緋文字』第1章最後の “It [rose] may serve, let us hope, to symbolize some sweet moral blossom, that may be found along the track, or relieve the darkening close of a tale of

human frailty and sorrow.” (48) を思い起こさせる。

第1章でホーソーンは獄舎のわきに野ばらを配置して、不吉な影をやどす獄門から始まろうとするこの物語の冒頭で見つけた野ばらの赤い花を一輪つみとって読者にささげ、「その花が物語の発展とともにうかがいがってくるやさしい美徳の花を象徴するか、それとも人間の弱さと悲しさにまつわる物語の陰気な結末をやわらげるのに役立つことを、作者としては祈りたい気持ちである」と述べている。そして第1章末尾で「人間の弱さと悲しさにまつわる物語の陰気な結末をやわらげるのに役立つ」ことを願って読者にささげたバラが、作品の最後で「影よりもなお暗い一点の燃えつづける光」となって『緋文字』を救うのである。

『アメリカン・ノートブックス』(*The American Notebooks*)でホーソーンは人間の心を洞穴にたとえた次のような文章を書いているが、この一節はホーソーンの世界を集約する文章として引き合いに出されることが多い。

The human heart to be allegorized as a cavern; at the entrance there is sunshine, and flowers growing about it. You step within, but a short distance, and find yourself surrounded with a terrible gloom, and monsters of divers kinds; it seems like hell itself. You are bewildered, and wander long without hope. At last, a light strikes upon you. You press towards it, and find yourself in a region that seems, in some sort, to reproduce the flowers and sunny beauty of the entrance, — but all perfect. These are the depths of the heart, or of human nature, bright and beautiful; the gloom and terror may lie deep, but deeper still is this eternal beauty. (237)

第1章で獄舎のわきに咲いている赤いバラを洞穴の入り口に咲いている花と捉え、墓石の彫られた紋章として『緋文字』の最後を飾る光が洞穴の奥に差し込んでくる光であるとみなせば、この文章はそのまま『緋文字』を集約しているとも言える。

タイポロジカルな読みをすれば、こうして赤いバラと燃えつづける光の間に見事な予型と対型の符合が完成するとなるわけであるが、とはいえ、バラが光となってタイポロジーが成立すると言っただけでは、今一つ説得力に欠けるかもしれない。バラと光の間にさらに本質的なイメージの連鎖がなければなるまいし、「影よりもなお暗い」という語句も気になる。影よりもなお暗い光とは一体どんな光なのであろうか。次いでバラと光と影の関係を探ることにするが、「影よりもな

お暗い一点の燃えつづける光」とは何とも不思議な、不気味とさえ言える光である。しかもその光が『緋文字』を救うとホーソーンは言う。その真意は那邊にあるのか。

影よりも暗い光とはいかなる光なのであろう。普通、光は闇はもとより影よりも明るい。にもかかわらず、ホーソーンは“THE LETTER A, GULES.”は影よりも暗い光なのだという。「影よりもなお暗い一点の燃えつづける光」は“ON A FIELD, SABLE, THE LETTER A, GULES.”という紋章用語による表現を言い換えたものである。とすれば“sable”と“gules”という「色」の検討が、この謎を解く手がかりを与えてくれるのではないだろうか。

いずれも紋章の専門用語であるので普段あまり見かけることのない言葉である。特に gules は極めて珍しい言葉であり、文学作品などでお目にかかることはほとんどないといっても過言ではない。まず sable だが、ホーソーンは『緋文字』で都合6回使用している。いずれも“the sable simplicity that generally characterized the Puritanic modes of dress”とか“In the array of funerals, too, — whether for the apparel of the dead body, or to typify, by manifold emblematic devices of sable cloth and snowy lawn, the sorrow of the survivors [...]” (82)、さらには“But we perhaps exaggerate the gray or sable tinge, which undoubtedly characterized the mood and manners of the age. The persons now in the marketplace of Boston had not been born to an inheritance of Puritanic gloom.” (230) といった調子で、時には死をも連想させる「ピューリタンの暗さ」を象徴する形容詞として用いられている。とすれば“ON A FIELD, SABLE”は「暗いピューリタンの世界」と読めることになるが、このような読みでは影よりも暗い光との意味上の対応関係が希薄である。もっと違った読みが可能なのは当然である。sable はもちろん shadow と連動させられているわけであるから、次に shadow に検討を加えてみたい。

作品中、shadow はそれこそ掃いて捨てるほど頻出するが、「影よりもなお暗い一点の燃えつづける光」としての“ON A FIELD, SABLE, THE LETTER A, GULES.”を考察するうえで興味深い個所がある。選挙日の説教を無事終えたディムズデイルは、ヘスターの力を借りて7年前にヘスターがパールを抱いて立たされたさらし台の上にのぼる。こうして「神がくだそうとしているかに見える審判」(“the judgment which Providence seemed about to work”)を群衆が黙って身

動きもせずに見守る中でいよいよ「罪と悲しみのドラマ」(“the drama of guilt and sorrow” [253]) が終幕を迎える。

正午をすこしすぎたばかりの太陽が、正義の女神の法廷で有罪の申し立てをするために大地に立ちはだかっているディムズデイルの姿を、くっきりと浮きあがらせる。最後の力を振り絞りながらディムズデイルは大声で語りかける。

“It [the scarlet letter] was on him! [...] God’s eye beheld it! The angels were for ever pointing at it! The Devil knew it well, and fretted it continually with the touch of his burning finger! But he hid it cunningly from men, and walked among you with the mien of a spirit, mournful, because so pure in a sinful world!—and sad, because he missed his heavenly kindred! Now, at the death-hour, he stands up before you! He bids you look again at Hester’s scarlet letter! He tells you, that, with all its mysterious honor, *it is but the shadow of what he bears on his own breast, and that even this, his own red stigma, is no more than the type of what has seared his inmost heart!* Stand any here that question God’s judgment on a sinner? Behold! Behold a dreadful witness of it!” (255; italics by Aoyama)

注目したいのは「ヘスターの緋文字は、男が自分の胸につけているものの影にすぎず、この男自身の赤い烙印すらもが、男の胸のうちをこがしていたもののしるしにほかならないのです！」という個所である。ここでいう shadow は明暗の暗としての影というよりは、いわば鏡像としての影である。そしてここでディムズデイルが語る緋文字とその影こそが、「影よりもなお暗い一点の燃えつづける光」となり、“ON A FIELD, SABLE, THE LETTER A, GULES.”となる。

ディムズデイルが語る緋文字はディムズデイルの胸に付けている緋文字のことであり、その影はヘスターが胸に付けている緋文字であるが、この二つの緋文字の関係は実像と鏡像、もしくは実体と象徴の関係となる。「美の芸術家」の最後にこの点に関連して興味深い文章がある。美の芸術家オーウェン・ウォーランド (Owen Warland) は幼馴染のアニー (Annie) の子供の誕生を祝って、本物そっくりの機械仕掛けの蝶を作って贈り物にするが、その蝶がためらうようにはばたき、まさにその子の指にとまろうとした瞬間、まだ空に舞っているうちに、子供はその蝶をひつつかんで、手のなかに押しつぶしてしまう。

And as for Owen Warland, he looked placidly at what seemed the ruin of his life’s labor, and which was yet no ruin. He had caught a far other butterfly than this. When the artist rose high enough to achieve the beautiful, the symbol by which he made it perceptible to mortal senses became of little value in his eyes while his spirit possessed itself in the enjoyment of the reality. (475)

この実体と象徴の関係がディムズデイルの緋文字とヘスターの緋文字の関係であると考えればよいであろう。

ここで果たしてディムズデイルの胸には本当に緋文字が刻まれていたのか、という問題が浮上してくる。「いま一度、ヘスターの緋文字をどうかごらんになってください！ きいてください、いかにも謎めいて恐ろしい緋文字も、男が自分の胸につけているものの影にすぎず、この男自身の赤い烙印すらもが、男の胸のうちをこがしていたもののしるしにほかならないということ！ 罪びとに対する神の裁きを疑われる方は、ここに立ってみられますか？ ごらんください！ その裁きの恐ろしい証拠をごらんになってください！」と語った直後、ディムズデイルは発作的に胸の垂れ襟をはぎ取る。

ここでディムズデイルの秘密は、すべてを告白されないままに終わってしまうのではないか、と思われたが、しかし、襲いかかろうとしている肉体の弱さ——とりわけ、精神の弱さに、ディムズデイルは打ち勝つ。助けの手を一切ふりきると、ディムズデイルは母子よりも一歩前に勢いこんで進み出る。

With a convulsive motion he tore away the ministerial band from before his breast. It [the scarlet letter] was revealed! But it were irreverent to describe that revelation. For an instant the gaze of the horror-stricken multitude was concentrated on the ghastly miracle; while the minister stood with a flush of triumph in his face, as one who, in the crisis of acutest pain, had won a victory. (255)

こうしてディムズデイルが発作的な身のこなしで胸から聖職者のつける垂れ襟をはぎとった瞬間、緋文字が姿を現す。ところが、ホーソーンは最終章で、ディムズデイルの胸には確かに緋文字があったというものから、いやそんなものはなかったというもので、群衆の目撃談をいくつか書き留めながら、

The reader may choose among these theories. We have thrown all the light we could acquire upon the portent, and would gladly, now that it has done its

office, erase its deep print out of our own brain;
where long meditation has fixed it in very undesirable distinctness. (259)

と述べて読者を煙に巻く。しかしながらホーソーンが読者を煙に巻いているのは、緋文字はあったとする目撃談を並べた後のことである。とすれば、読者にはこうしたいくつかの意見のうちから、どれか一つだけを選びとってもらえればいい、と読者に下駄を預ける際の「意見」はすべて緋文字があったとする証言ということになる。要するにディムズデイルの胸に緋文字はあったのであり、7年間の間ヘスターに対してはその役割をまだ果たしていなかった緋文字が(“The scarlet letter had not done its office.” [166]), ディムズデイルの告白によってその役割を果たし終えた(“it has done its office”)のである。

最後に“ON A FIELD, SABLE, THE LETTER A, GULES.”とバラの考察。先述したように、『緋文字』第1章末尾で「人間の弱さと悲しさにまつわる物語の陰気な結末をやわらげるのに役立つ」ことを願ってホーソーンが読者にささげたバラが、作品の最後で「影よりもなお暗い一点の燃えつづける光」となって『緋文字』を救うことになるのだが、この解釈を強固なものとするためには、バラと「影よりもなお暗い一点の燃えつづける光」としての“THE LETTER A, GULES.”との本質的な結びつきを究明する必要がある。

gules という紋章用語は特殊な単語であるためか文学作品での使用例は極めて少ない。管見の限り、英米の作家に限ってみれば、『緋文字』と先に引用したスコットの『軍医の娘』の他としては、シェイクスピア(William Shakespeare)が『ハムレット』(*Hamlet*)と『アテネのタイモン』(*Timon of Athens*)で、マーヴェル(Andrew Marvell)が「不運な恋人」(“The Unfortunate Lover”)で、スコットが『ウェイヴァリー』(*Waverley*)で、キーツ(John Keats)が「聖アグネスの前夜祭」(“The Eve of St. Agnes”)で、テニスン(Alfred Tennyson)が『国王牧歌』(*The Idylls of the King*)で、ボズウェル(James Boswell)が『サミュエル・ジョンソン伝』(*Life of Samuel Johnson*)で、ブラウニング(Robert Browning)が『指輪と本』(*The Ring and the Book*)で、マーク・トウェイン(Mark Twain)が『ハックルベリー・フィンの冒険』(*The Adventures of Huckleberry Finn*)で、いずれもそれぞれ一度(ただし『アテネのタイモン』の場合は同一個所で繰り返し用いているので正確には二度)使用しているだけである。マーヴェルの場合は、詩の最終行が“In a field

sable, a lover gules.”(*Works* 46)となっており、『緋文字』の“ON A FIELD, SABLE, THE LETTER A, GULES.”と酷似しているので興味をそそられるところだが、内容面での影響関係は希薄である。ホーソーンが表現を模倣したとみなすべきところであろう。

バラと gules の関係については、中澤早苗が“Sin and Redemption: Color Symbolism in *The Scarlet Letter*”で“The tombstone is carved with the gules letter of A on the sable field. The scarlet letter A, which is illustrated in the story as the letter of sin and admonishment, becomes gules. The word gules is the reddish hue color in heraldry with its origin in Arabic which signifies a red rose [...]” (37) と興味深い指摘をしている。gules の語源が赤いバラという意味のアラビア語というわけだから、これは極めて重要な指摘である。

またエルドレッド(Eric Eldred)がネット上に発表している詳細な *Notes to The Scarlet Letter* で“James Parker’s *Glossary of Terms Used in Heraldry* gives a fuller description of the term “gules,” indicating a little more connection to the red rose at the beginning of the story.” (<http://www.ibiblio.org/eldritch/nh/sl24-n.html>) と指摘している。エルドレッドが挙げているパーカーの辞典は1894年に出版されているが、gules について以下のように記述している。

Gules, (fr. gueules): the heraldic name of the tincture red. The term is probably derived from the Arabic gule, a red rose, just as the azure was derived from a word in the same language, signifying a blue stone. The word was, not doubt, introduced by the Crusaders. Heraldry have, however, guessed it to be derived from the Latin gula, which in old French is found as gueule, i.e. the “red throat of an animal.” Others, again, have tried to find the origin in the Hebrew word gulade, which signifies red cloth. Gules is denoted in engravings by numerous perpendicular lines. Heraldry was blazoned by planets and jewels called it Mars, and Ruby.

The name variously spelt goules, goulez, goulz, gowlys, occurs frequently in ancient rolls of arms, as will have been observed by the examples given throughout the Glossary.

In the Siege of Carlaverock, as has been noticed under Colour, the terms both rouge and vermeile are poetically used, and to these may be added rougette.

(<http://www.heraldsnet.org/saitou/parker/jpglossg.htm>)

以上、赤いバラと「影よりもなお暗い一点の燃えつづける光」としての“THE LETTER A, GULES.”との本質的な結びつきを検証してきたが、このように読むことによって、さらに第1章末尾で「人間の弱さと悲しさにまつわる物語の陰気な結末をやわらげるのに役立つ」ことを願ってホーソーンが読者にささげた赤いバラが、作品の最後で「影よりもなお暗い一点の燃えつづける光」となって『緋文字』を救うことが明らかとなる。

最後に違反紋章について。ホーソーンはなぜ“ON A FIELD, SABLE, THE LETTER A, GULES.”という違反紋章を描いたのだろうか。スコットの例のように gules と or を組み合わせて“ON A FIELD, OR, THE LETTER A, GULES.”とでもしておけば、好事家を戸惑わせることなどないはずなのに、何ゆえ、あえて“ON A FIELD, SABLE, THE LETTER A, GULES.”と違反紋章に仕立てたのだろうか。『緋文字』入門』最終章でも指摘したように、ホーソーンはヘスターとディムズデイルの墓の描写を通して、現世における愛と来世における愛のコントラストを強調している。ホーソーンは“It was near that old and sunken grave, yet with a space between, as if the dust of the two sleepers had no right to mingle. Yet one tombstone served for both.”という描写の中で、dust と stone という時間・現世と永遠・来世を表象するメタファーを巧みに用いている。二人の墓の間に隔たりがあるのは現世では認められない愛であることの表象であり、その二つの墓を結ぶ一つの墓石は来世での愛の成就の表象である。違反紋章についても同様の解釈が可能である。すなわち、墓石の紋章の“ON A FIELD, OR, THE LETTER A, GULES.”という違反紋章の色の組み合わせは、紋章学的にありえない彩色を墓石の紋章に施すことによって、現世では許されない愛が来世で成就することを象徴していると解釈できる。これが謎めいた違反紋章の隠された意匠である。

ラドウィグの研究が明らかにしたように、17-18世紀のピューリタンは墓石の装飾を通して霊界の思想を

表現した(Ludwig 5)。「人間の弱さと悲しさにまつわる物語の陰気な結末をやわらげる」ために、ホーソーンはヘスターとディムズデイルの来世での再会をひとつの墓石に託した。墓石には「人間の弱さと悲しみの物語の暗い結末をやわらげる」赤いバラとして「黒キ紋地ニ赤キ文字 A」が刻まれ、赤いバラと赤キ文字 A のタイポロジーが成立する。ヘスターには“*There dwelt, there trode the feet of one with whom she deemed herself connected in a union, that, unrecognized on earth, would bring them together before the bar of final judgment, and make that their marriage-altar, for a joint futurity of endless retribution.*” (80) と、最後の審判の席を婚姻の席に変えるというひそかな願いがあったが、ホーソーンはこのヘスターの願いを「影よりもなお暗い一点の燃えつづける光」「赤キ文字 A」として成就させているのである。

引証文献

- 青山義孝. 『緋文字』入門』.(e ブックランド社, 2010年).
- Eldred, Eric. *Notes to The Scarlet Letter*. <http://www.ibiblio.org/eldritch/nh/sl24-n.html>.
- Hawthorne, Nathaniel. *The American Notebooks*. Columbus: Ohio State UP, 1972.
- . *The Scarlet Letter*. Columbus: Ohio State UP, 1962.
- . *The Mosses from an Old Manse*. Columbus: Ohio State UP, 1974.
- Ludwig, Allan I. *Graven Images: New England Stonecarving and Its Symbols, 1650-1815*. Middletown: Wesleyan UP, 1966.
- Marvell, Andrew. *The Works of Andrew Marvell*. Hertfordshire, Wordsworth Editions, 1995.
- 森護. 『ヨーロッパの紋章——紋章学入門』. 河出書房新社, 1996年.
- Nakazawa, Sanae, “Sin and Redemption: Color Symbolism in *The Scarlet Letter*”. *OAK*, 7 (2011), 1-41.
- Parker, James. *Glossary of Terms Used in Heraldry*. <http://www.heraldsnet.org/saitou/parker/jpglossg.htm>.
- Scott, Walter. *The Surgeon's Daughter in Castle Dangerous & The Surgeon's Daughter*. London: J. M. Dent & Sons, 1902.